



## 第37期第2回京都市社会教育委員会議の様をマナビがレポート！

令和7年12月3日（水）、京都市子育て支援総合センターこどもみらい館において、第37期京都市社会教育委員会議の第2回目となる会議が開催されました。今回は、「子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方について」というテーマで議論が行われました。

### ■ 出席委員（17名のうち15名） ※五十音順

伊住 禮次郎 委員、上田 清乃 委員、ウスビ・サコ 委員、小林 一彦 委員、金剛 龍謹 委員、佐竹 美都子 委員、塩見 葉子 委員、田村 圭吾 委員、豊島 伊織 委員、豊田 まゆみ 委員、永田 紅 委員、本郷 真紹 委員、柁木 良子 委員、松田 規久子 委員、南 見奈子 委員

開 会

#### 1 議 事

「子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方について」

#### 2 報 告

- (1) 京（みやこ）まなびミーティングについて
  - (2) 京（みやこ）まなびいニュースレターについて
  - (3) 令和7年度指定都市社会教育主管課長会議及び社会教育委員連絡協議会について
  - (4) 京都市生涯学習市民フォーラム 令和7年度総会について
- (説明) こどもみらい館、子育て図書館について

#### 3 主催事業 及び 刊行物の案内

閉 会

### ■ 議 事一「京都市子どもの読書活動推進のための取組の在り方」について

#### ○ 事務局説明（嶋本学校地域協働推進課長）

読書専門部会の進捗状況、子どもや保護者を対象に実施したアンケート結果とその分析について説明します。読書専門部会ではこれまで3回の協議を行っており、直近の第3回においては、地域で尽力いただいている子ども文庫の取組紹介、アンケート結果を踏まえた読書活動推進のための方策、京都ならではの魅力に親しむ読書について協議いただきました。委員からは、学校での組織的な取組の必要性、公共図書館の在り方への新たな視点、子どもの本の世界を広げる工夫、小学生向けの郷土資料の充実、「京都ならではの」を捉える際には、伝統文化や歴史だけでなく、京都の先進性にも光を当てることが重要であることなど、多くのご指摘をいただいております。

#### ○ 事務局説明（小田家庭教育事業係長）

令和7年5月に実施した児童生徒の読書の実態把握アンケートについて、特徴的な結果とそれを踏まえた事務局の分析、今後の取組の方向性等を報告します。

まず、子どもの読書活動の現状です。不読率は全国平均とほぼ同水準ですが、前回調査と比べると小・中学校とともに増加しています。一方で、学校以外で本を読まない割合よりも、学校での活動を含めた1

冊も本を読まない割合の方が低いことから、学校での取組が一定、読書の機会を支えていることが分かります。ただし、月間読書冊数では「0冊」と「11冊以上」が増加し、読書量に二極化の傾向が見られます。

次に、読書に対する意識です。「本を読むことが好き」「大切だと思う」と答える子どもの割合は依然高いものの、いずれも前回調査より減少しています。本を読まない理由としては、「読む時間がない」「読みたいと思う本がない」「興味がない」が多く、小中学生では「読むのが苦手」と感じている子どもも一定数います。分析すると、「時間がない」背景には、学習や活動で物理的に余裕がない場合と、自由時間はあっても読書以外に使っている場合の二つがあると考えられます。

自由時間の過ごし方は、小中高生ともに動画視聴やゲーム、SNSが上位を占めており、趣味や娯楽の選択肢が増えた中で、読書の優先順位が下がっている現状がうかがえます。一方、高校生では「今後読書量を増やしたい」と考える生徒が多く、将来に向けて読書の力を身に付けたい意識も見られました。

また、図書館の利用状況では、学校図書館・公共図書館ともに利用が十分とは言えず、蔵書や雰囲気、使いやすさへの課題が示されています。加えて、家庭での読み聞かせ経験は減少傾向にある一方、地域やボランティアによる読み聞かせの経験は増えており、地域の力が子どもの読書を支えていることも明らかになりました。

これらの結果から、読書の推進には日常の中で本と出会う機会を増やし、子どもの興味・関心につながる仕掛けをつくることが重要だと考えます。一つ一つの小さな取組を積み重ねることで、子どもの読書の世界が広がり、忙しい中でも主体的な読書活動につながります。

本日の協議では、「子どもの読書の世界を広げるために何ができるか」「子どもの本との出会い＝タッチポイントをどのように増やすか」について、ご意見をいただければと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）



「子どもの読書の世界を広げる」とは、本のジャンルや対象となる本の幅を広げるという意味か、本と出会う機会、いわゆるタッチポイントを増やすことを指しているのでしょうか。

また、対象は紙の本に限るのでしょうか。最近では、Web上にも文章、イラスト、アニメなど、文字を中心とした多様なコンテンツがありますが、それらは読書の対象外とするのかどうか。その点についてもお考えを伺いたい。

○ 事務局

アンケート結果から、「もう読みたい本がない」「図書館の本は読み切ってしまった」といった子どもたちの声があり、そこから、子どもたちが思い描く「読書」や「本の選択肢」が、学校や身近な環境にある限られた範囲にとどまっているのではないかと感じました。

本来、読書にはもっと多様なジャンルやレベルがあり、学校に置いてある本が全てではありません。「読書の世界を広げる」とは、そうした本の広がりや奥深さを子どもたちに示し、今読んでいる本の先に、別の分野の本へと自然に関心が広がっていく状態をつくることだと考えています。

読書は間口が広く、成長に応じて深まっていくものです。その可能性を子どもたちに感じてもらいたいという問題意識から、この議題を設定しました。

また、電子書籍については、紙か電子かという「メディアの違い」はあるものの、基本的には読書の対象として含めて考えたいと思っています。ただし、Web 記事や SNS 上で流れてくる活字を読むこととは、同じ「読む行為」であっても、電子書籍とは価値や位置づけが異なるのではないかと感じており、現時点では「電子書籍を含む書籍全般」を読書の対象として考えていただければと思います。

○ 伊住 禮次郎 委員（茶道総合資料館副館長）



私自身も子どもを育てる立場として、不読率が非常に高いということに関心を持ちました。幼稚園や小学校低学年の子どもたちの場合、読書習慣はどうしても家庭での読み聞かせや、子どもと保護者で図書館に行って本を選ぶといった日常的な関わりに大きく左右されます。こうした「本に触れる」経験は、読書へのタッチポイントとして非常に重要だと思います。

一方で、現在は YouTube などの動画コンテンツをはじめ、子どもたちを引きつける楽しいものが非常に多く、必ずしも本が読書の最初の入口になるとは限りません。電子書籍の捉え方や、書籍内容を紹介する動画など、どこまでを「読書」と考えるかについても難しさがありますが、最終的に一冊の本にたどり着く入口がどれだけ用意されているかが重要ではないかと感じています。実際、アンケートでも「本を読む」「漫画を読む」「雑誌を読む」と項目が分かれており、漫画がきっかけとなって書籍へと関心が広がる子どもも少なくありません。行間を読む力は、漫画を通して育まれる側面があると思います。もちろん、専門家による選書が必要だという前提にはなりますが。

こうした点を踏まえると、不読率の高さの背景には、「本を手にする機会そのもの」が減っている現状があると考えます。そのため今後は、タッチポイントをどう増やすかという議論が重要になってくるのではないのでしょうか。

私自身、こどもみらい館によく通っていましたが、歌やオルガン演奏を取り入れた読み聞かせ会に参加し、そこで興味を持った本を実際に図書館で借りるという経験をしました。小さな子どもにとっては、こうした体験が本への入口になることも多いと思います。どのような催しが、どこで行われているのかといった情報がより共有されれば、足りていない部分や工夫できる点について、さらに議論を深めることができるのではないのでしょうか。

○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）



私は地域で活動する図書ボランティアとして、小学校で読み聞かせを行っています。読書週間に合わせた全校向けの読み聞かせや、週 1 回実施している育成学級での読み聞かせ、さらに季節やテーマに沿ったイベントの実施などです。活動を通して大切にしているのは、子どもたちに「本は楽しい」「本は面白い」と感じてもらうことです。

例えば、落ち葉を題材にした絵本の読み聞かせでは、物語に合わせて実際の落ち葉で実演を行いました。絵本の世界が目の前に広がるような体験に、子どもたちは驚きと喜びを見せ、自然と物語の世界に引き込まれていきました。このように、読み聞かせに体験的な要素を組み合わせることで、本の魅力をより深く伝えることができます。

幼児期の読書は、成果がすぐ目に見えるものではありませんが、言葉の力を育てたり、知らない世界

に触れたり、集中して話を聞く力を養ったりと、将来につながる大切な土台を作ります。そのため、子どもだけでなく保護者にも「本に触れる時間の大切さ」を伝えるようにしています。すべての子どもが本好きになるわけではありませんが、成長の過程で本と出会う機会を大人が用意することは非常に重要だと思います。

また、子どもたちが本に出会う場として、学校図書館の役割はとても大きいです。家庭環境には差があり、地域の図書館が距離の面で利用しづらい場合もあるため、学校図書館は最も身近な存在です。一方で、学校司書の配置や蔵書の充実、新刊購入のための予算確保など、改善すべき点も多いです。

読み聞かせ活動は、子どもたちの反応に元気をもらえる、とても楽しい時間です。これからも本を選ぶ喜びを大切にしながら、子どもたちに本の魅力を伝え続けていきたいと思います。

#### ○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学大学院農学研究科研究員）

子どもは、大人や先生から勧められた本をなかなか素直に読んでくれません。アンケート結果にもあるように、「読んでほしい」と強く働きかけるよりも、机や食卓に本をそっと伏せて置いておくなど、自然に目に入る工夫が効果的です。本が開いて置かれていると、まるで本が活着しているような印象を与えます。こうした日常の中の「仕込み」が、子どもが本に手を伸ばすきっかけになるのではないのでしょうか。

また、子どもに本を読ませるだけでなく、子どもが読んでいる本を大人が読んでみることも大切だと思います。私自身、子どもが寝た後に机に置いてあった本を読んでみたところ意外に面白く、翌朝「どこまで読んだ？」という会話が生まれました。本を紹介したりするのは、読書を一方的なものではなく、共有できる楽しみに変えてくれます。

一方、多くの子どもが苦手意識を持つ読書感想文は、形を見直してもよいのではないかと思います。内容を立派にまとめようとすると、どうしても形式的な文章になりがちです。そこで、「どんなふうに本を読んだか」を書く報告形式にし、読んだ時間や場所、「寝る前に」や「トイレで」など読書体験を書く形にすれば、子どももよりいきいきと表現できると思います。

さらに、紹介されていた三宅香帆さんの言う「ノイズ」の考え方も重要だと感じました。物語の筋に直接関係しない情景描写は飛ばされがちですが、そこにこそ感情や空気感が込められています。効率やタイパ（タイムパフォーマンス）が重視される今の時代だからこそ、遠回りに思える部分を味わう力を、読書を通して育てていけたらと思います。

他にも、歌や漫画をきっかけに昔の読書風景を知り、今と比べて家族で話すことも、読書の楽しさを広げる一つの方法だと思います。

#### ○ 松田 規久子 委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）

読書感想文ではなく、「読書体験記」という取組があります。これは、自分の経験を必ずその本と照らし合わせて書く必要があり、なかなかハードルが高いものです。今回のテーマである「子どもの読書の世界を広げる方法」もとても難しい課題であり、近道はないように思います。



子どもは月齢や年齢により日々発達していきますので、乳幼児期は親への働きかけが重要です。また、共働き家庭が増える中で、保育園や幼稚園における絵本や図書の環境整備も重要です。さらに、小学校では学校図書館の役割が非常に大きい。家庭で本に触れる機会が少ない子どもにとって、学校図書館は唯一の読書環境です。現在、学校司書が配置されていますが、周りの先生や管理職と連携し、組織として学校司書の仕事が機能しているかが気になります。



中学生になると、子ども同士や高校生・大学生といった年上の存在が大きくなります。大学の図書館を訪れる機会や大学生との交流など、非日常の空間で本に触れる体験を提供することもよいと思います。高校生はほぼ大人と同じと捉えて、本人の意思を尊重し、一人の大人として本を勧めるのがいいのではないのでしょうか。

結局、特別な近道はなく、これまでの取組を着実に続け、目の前の子どもにとって何が必要かを見極めて実践することが重要だと思っています。

#### ○ 豊島 伊織 委員（市民公募委員）



「読書の奥深さを示していきたい」というお話や、部会からの働きかけについて、やや啓発的・教育的な印象を受けました。私自身、この10年ほど子どもや若者に関わる活動を続けてきましたが、彼らには独自の文化や価値観があり、そこに寄り添った関わり方が必要だと感じています。

今回のデータから特に共感した点は二つあり、一つは、スマートフォンやゲームなどの娯楽時間が明らかに増えていることです。中学生ではメディアの接触時間が大きく増え、小学生も同様で、現場感覚とも一致します。もう一つは、学校生活の過密化です。勉強や部活動に加え多様な活動が増え、子どもたちは忙しい毎日を送っています。

また、注目すべき点として、図書館に「滞在できる居場所」を求めるニーズが高まっていることがあります。データからは、中学生は「友達と過ごせる場」、高校生は「勉強できる場」を求めていることがわかりますが、「POP-UP LIBRARY」のような取組は、より積極的に発信する必要があると思っています。

高校生の本の選び方を見ると、ドラマやアニメ原作など、人気コンテンツとのつながりが強く見られます。こうした実態を踏まえ、引きのあるコンテンツを軸にした新たなアプローチも検討する価値があると考えます。

#### ○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

以前、中央図書館でビブリオバトルを見学しました。子どもたちが自分の言葉で本の魅力を語る姿は印象的で、同世代に与える影響も大きいと感じました。大人から勧めるより効果的で、こうした機会が増えれば取組の幅も広がると思います。

#### ○ 南 見奈子 委員（市民公募委員）

子どもたちの読書活動を推進するにあたり、まず「目的」と「対象」から前提を考えてみました。

目的については、読書を通して得られる豊かな体験や、国の読書活動推進計画を踏まえた京都市の第

4次計画に示されている内容にあると思います。

対象は「すべての子ども」ですが、すべての子どもに読書をしてほしいと願っても、実際には多くの阻害要因があります。私は大きく三つの要因があると考えました。



一つ目は社会環境要因です。SNSやデジタル環境の広がり、学力偏重や塾通いによる多忙さなどから、読書に向かいにくい状況が生まれています。二つ目は家庭環境や文化資本の差です。保護者が忙しくて読み聞かせができない家庭や、経済的理由で本が身近にない家庭もあり、こうした環境差が読書経験に影響していると感じます。三つ目は個人要因で、視覚障害や発達障害、ディスレクシア

(※)など、文字を読むことに困難を抱える子どもたちの存在です。個人要因については、デジタル端末や大活字本、オーディオブックなど、子どもの状態に応じた読書環境を整えることが重要であり、すべての子どもがそれぞれの状況に応じて読書にアクセスできる環境づくりが求められると考えます。

(※)ディスレクシアとは、全般的な発達の遅れはないけど、文字の読み書きに困難があることだよ



私が特に考えたいのは、家庭環境や文化資本の差をどう埋めるかという点です。文化資本の差が学力や将来の格差につながるという指摘もあり、社会教育として読書活動を支える必要があると感じています。その一つの方策として、今年度から京都市で始まった「地域学校協働活動推進員」を活用し、学校・地域・ボランティアが連携しながら、学校図書館を中心に読書を支える仕組みを広げていくことが必要だと思っています。

#### ○ 事務局

「[地域学校協働活動推進員](#)」とは、「学校と地域の架け橋」となっていただく方です。京都市には、以前から地域の方々が学校に関心を寄せ、地域ぐるみで子どもを育てる文化が根付いており、学校と地域の連携を深めてきました。しかし、近年は全国的に地域コミュニティの弱体化や人間関係の希薄化が進み、地域の担い手不足が学校教育にも影響を及ぼしてきています。そこで、今年度、学校と地域をつなぐコーディネーター「地域学校協働活動推進員」を試行的に14の学校に配置しました。これまで学校運営協議会の中で、図書館運営部会やボランティア部会など、地域の方を交えた取組が自然に形成されていましたが、今後は「地域学校協働活動推進員」の配置により、地域の力をより一層活用できる方策ができると考えています。

#### ○ 小林 一彦 委員（京都産業大学日本文化研究所長）

二点述べたいと思います。一つ目は、読書の実態把握のためのアンケート調査についてです。そもそも、読書とは何か、紙媒体だけに限定していいのかという問題があります。現在、私たち書き手が原稿用紙を使うことはほとんどなく、電子媒体に直接文字を入力して、それが活字となり紙媒体になる場合もあれば、Webで公開される場合もあります。論文も印刷せずWebのみで公表することが増えています。受け手も同様で、Web上で読書する子どもたちが増えています。紙媒体にならない小説やWeb発の作品も読書の間口を広げており、これらも読書として捉えるべきではないでしょうか。



二つ目は、読書の深さについてです。奥深い読書という観点で見ると、塾や習い事が読書の妨げになっているように感じますが、実際には多くの子どもが塾に通っており、そこでは習熟度に応じて質の高い読書会が行われていることがあります。入試問題に出るような作品を深く読み込み、回答を導く訓練を何度も行っている子どもも多いでしょう。そういった子どもたちは、相当な読書をしているはずですが、本人は気づいていないかもしれませんが、これは読書といえると思います。

こうした状況を踏まえ、行政がどのようなサポートを行い、読書活動を推進するのが非常に重要です。アンケートには、子どもたちを取り巻く状況や読書の実態がよくあらわれており、その中で、学校教育、地域教育、さらには生涯学習の一環として、大人も関わっていくことが大切だと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

「読書」や「本」をどう定義するのか。私が懸念しているのは、その定義が受け手のイメージにより大きく変わる点です。実際には多くの読書をしている子どもであっても、「あれはやらされているから読書ではない」となると、「本を読んでいません」と回答するかもしれません。その結果としてアンケートの数値がどこまで公平性や客観性を持っているのか、判断が難しくなると感じています。今後はアンケートの集計方法だけでなく、問いかけ方そのものにも工夫が必要だと思います。

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

今回の協議題は捉えどころが難しい部分もありますが、特に懸念しているのは、不読率の増加と、「本は大切だと思っているが読む時間がない」「読みたい本がない」「読むことに興味がない」といった子どもたちの現状です。子どもたちなりの好奇心はゲームやスポーツなどに見られるものの、社会で役立つ力という視点では、知的好奇心が十分に育ってないのではないかと感じています。



私は、社会課題を見つけ、自ら調べ、考え、解決できる大人へと成長するために、読書は非常に大切だと思っています。問題を見つけ、調べ、考え、掘り下げ、結論を導く一連の流れは社会で求められる力であり、その基として読書が大きな役割を持つと思っています。

また、授業の中に、本を使って調べてアウトプットする課題を取り入れることも有効だと思います。国語の読書感想文に限らず、理科や社会など他教科でも、図書館を活用した調べ学習をすれば、自然と本に触れる機会が増えるはずです。

最近は商業施設のフードコートが子どもたちの居場所となり、宿題をしたり本を読んだりする姿をよく見かけます。これが図書館でもそうなれば、週末の「友達と会う場所」として図書館に行き、本に触れる機会が増えるのでしょうか。

また、幼稚園や保育園では、常に身近に本が置かれていて、図書館に行かなくても本に触れることができました。学校でも手に取りやすいところに本を置くなど、工夫次第で読書のタッチポイントは増やせると思います。

○上田 清乃 委員（京都市立南太秦小学校 校長）

改めて学校の果たす役割の大きさを実感しています。本校では、体育館に多くの本を並べ、子どもたち自身が「学校に置いてほしい本」を選ぶ「選書会」を実施しています。自分で選んだ本が図書館に並ぶことで、読書との新たな出会いが生まれていると感じます。また、年2回の読書週間には、図書委員の児童が学年別に本を紹介し順位付けするビブリアバトルを行っています。さらに、近隣の図書館の職員に教室で本を紹介していただくブックトークや、週1回、読み聞かせ活動も行っており、家庭で読み聞かせの機会が少ない子どもにとって貴重な体験になっています。



また、担任が学校司書と連携し、授業内容に合った本を教室に置くなど、読書の環境づくりも進めています。学校でさまざまな取組を進めても、家庭アンケートでは「本を読むことが少ない」という回答が多く、学校での本との出会いを継続した読書習慣につなげる難しさも感じています。そのため、参観日にブックトークを行い、家庭との連携も図っています。

今後も、学校司書の配置充実を要望しつつ、より良い読書環境を整えていきたいと考えています。

#### ○ 塩見 葉子 委員（令和7年度京都市PTA連絡協議会会長）



夏休みの宿題で、親が子どもに本を読み、子どもがその感想を書く。さらに子どもが親に本を読み聞かせ、親が感想を書きそれを廊下へ掲示する「親子郵便」というものがありました。しかし、これは保護者にとって大きな負担となり、熱心に取り組む家庭と、負担に感じる家庭との差が広がり、結果的になくなりました。

アンケート結果を見ると、子どもたちは本を読みたい、今後も読書に向き合いたいという気持ちを持っている一方で、保護者自身はあまり本を読まず、子どもに勧めたい本が思い浮かばない状況も見受けられます。「子どもの世界を広げるにはどうすればよいか」という今回の議題は、特にこれから本と出合っていく年代の子どもたちにとって重要だと感じます。そのためには、意図的に教えるだけでなく、日常の中での「偶然の出会い」を増やすことが重要だと思います。

その点で、地域との関わりを考えたとき、京都には商店街が多く、子どもが日常的に通る場所でもあります。例えば、商店街の各店舗に1冊ずつ、八百屋さんには野菜の本、ケーキ屋さんにはお菓子の本といった形で、その店に関係する本を置く。通りがかりにふと手に取る1冊との出会いがあれば、子どもだけでなく大人も興味を持つきっかけになると思います。

また、フードコートや図書館では「友達と話したい」「一緒に過ごしたい」という声も多く聞かれます。混雑しない時間帯に限定するなど工夫すれば、本を数冊置き、子どもたちが自然に本に触れる場にも考えられます。実際に、子ども同士で勉強している姿もよく見かけます。身近な場所に本がある環境をつくることで、子どもも大人も本に親しむタッチポイントが増えていくのではないのでしょうか。

#### ○ 榎木 良子 副議長（同志社大学 国際教養教育院 嘱託講師）

アンケートでは、「本を読む時間がない」「読みたい本が見つからない」「どの本を読めばよいかわからない」といった声が多く見られました。この状況は、私の授業を受けている大学生が、就職活動の際に「何をしたいのかわからない、何に興味があるのかわからない」と悩む姿と重なります。授業の初回に、

得意なことや目標を聞いても、すぐに答えられない学生は少なくありません。子どもたちも同様に、自分の興味や関心がはっきりしていないため、どの本を手にとればよいのかわからないのではないのでしょうか。

現代は、SNS やゲーム、YouTube など、受け身でも何となく楽しい情報が次々に流れてきます。これらを楽しむことを否定するものではありませんが、自分で問いを立て、探究する経験は以前より少なくなっているように感じます。だからこそ、探究学習と同じように「自分は何に夢中になれるのか」「どんなときにワクワクするのか」を見つめ直す「自分探究」が重要だと思います。



子どもたちは、スポーツや昆虫、宇宙、お菓子作り、絵を描くことなど、いろいろなことに興味を持っています。「なぜそれが楽しいのか」を考える機会を持つことで、興味や関心はより深まっていきます。読書が苦手な子どもには、まず図録やイラストの多い本、絵本などから入り、ページをめくること自体を楽しめるようにします。興味が高まってきた段階で、専門書や小説などに読書の幅を広げていくことができます。このように「自分探究」を土台に、学校司書が子ども一人ひとりに合った本を勧める、いわばパーソナル読書のような取組ができればよいのではないのでしょうか。また、図書館でテーマ別のコーナーを設けたり、公園や植物園など、子どもがリラックスできる場所に本を置いたりすることで、より自然に読書への関心が生まれると思います。

最後に、提案として、出生届提出時に京都市推薦の絵本を 1 冊贈るといのはどうでしょうか。誕生の記念として贈られた本が、将来、本に触れるきっかけになるとともに、京都市から誕生祝いにももらった本を通して京都への親しみにもつながると思います。

## ○ 事務局

京都市では、4か月児健康診査時に絵本セット「読み聞かせスタートパック」をお渡ししていますが、出生届を提出したタイミングで「誕生した記念に本を贈る」というのは、その子が生まれたことを祝う特別な意味があり、のちに読書のきっかけにもなるアプローチだと思います。

## ○ 金剛 龍謹 委員（能楽金剛流若宗家）



能のような舞台芸術は、本と映画の中間に位置する表現のように感じます。映像作品にも優れたものは多くありますが、現代の SNS 社会では、数秒で理解できる刺激的でわかりやすい情報があふれ、次々と消費しながら物事の良し悪しを判断する傾向があります。そのような環境では、じっくりと考え、想像力を働かせながら向き合う体験が得にくくなっているのではないのでしょうか。

読書も能も、共通して重要なのは「想像力」です。読書では文字から情景や登場人物を思い描き、物語の世界に没入していきます。能もまた、舞台装置を最小限に抑え、謡の言葉を手がかりに、観る側が自ら想像を膨らませて舞台の世界をつくり上げていきます。こうした想像力が若い世代から失われてしまえば、読書だけでなく、様々な伝統文化にも触れにくくなってしまおうと思います。自分の内側で世界を構築する体験を身近に得られる手段の一つが、読書なのではないのでしょうか。

かつて識字率が低かった時代には、能や狂言などの演劇が、古典文学に触れる入口となっていました。能を通して源氏物語の世界が広く伝えられてきたように、演劇を通して文学が伝わるという観点は、現

代にもあっていいと考えます。

私は学校巡回公演で小・中学校を訪れ、狂言師の方と一緒に上演することがあります。狂言『柿山伏』では、舞台に置かれた一つの桶を「柿の木です」と言葉で示すだけですが、役者の語りによって、子どもたちの中に本当に柿の木が見えてきます。鑑賞後に「柿の木が見えた」と話す子どもも多く、これは読書や演劇を通して育まれる「想像力」の力だと感じます。こうした体験を、子どもたちにたくさん経験してほしいと思います。

○ ウスビ・サコ 委員（京都精華大学元学長／名誉教授、東京都公立大学法人理事）

私は京都精華大学で図書館長を務めており、本を増やすことよりも、「どうすれば学生が図書館に来てくれるか」を常に考えています。課題作成の時には参考書を求めて来館しますが、日常的に来る学生は多くありません。一方で、館内に設けたラウンジは非常ににぎわっています。その横に展示スペースを設け、流行している本などを置くと、会話の延長で自然と本に触れる姿が見られます。本を読まない世代を一概に否定するのは難しく、知識として読むのか、娯楽として読むのかという点も判断が分かれます。



本学にはマンガ学部があり、学生たちは日常的にマンガを読みます。彼らにとってマンガは立派な資料であり、私はそれも読書への入口になると考えています。マンガから小説、音楽へと展開するミックスメディアの流れは、子ども世代には自然ですが、大人の実感とはずれが生じがちです。今の子どもたちは刺激の多い環境に生きており、「本だけ」を求めるのは難しい現実があります。

また、日本ではブックカバーで本のタイトルを隠すことが多いので、読書体験が共有されにくい。家庭でも本を通じた会話が少ないのではないのでしょうか。さらに、図書館自体が「行きたくなる空間」になっていない点も課題です。海外ではデザイン性の高い、出会いの場としての図書館が多くあります。図書館は総合的な情報空間であり、その中の一つとして本がある。読書は依然として重要ですが、私たち大人がアプローチの方法を変えていく必要があると感じています。

○ 田村 圭吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長、京料理 萬重 代表取締役社長）

アンケートにもあるように、今の子どもたちは忙しく、家庭でも読書の時間がなかなか取れない現実があります。子どもたちの興味はそれぞれ異なり、決めつけて考えるのはよくありません。例えば、スポーツをしている子は本が苦手と思われがちですが、私の子どもは野球をしており、中学生の頃にルールブックや技術書を自ら買いたいと言いました。試合ではベンチにいることもありましたが、知識を得ることで、作戦面で役割を果たせることに喜びを感じていました。このように、子どもが興味を持つ分野の本から、自然と読書につながるのだと思います。先ほど話に出ていたように、地域とも連携しながら、子どもたちがふと出合える場所に本を置く仕組みがあるとよいと感じました。



私は料理人ですが、料理も技術書や茶道や能など他分野から着想を得ることがあります。若い人に自分が分かりやすいと感じた本を勧めると、そこから興味が広がることも多いです。予算の課題はありますが、子どもが様々な場面で本に触れられる取組が進むことを期待しています。

○ 豊島 伊織 委員（市民公募委員）

タッチポイントの観点から、「読書の機会をどう増やすか」について、二点提案です。一つ目は、短期的で即効性のある取組として、図書館の SNS 運用の強化です。データを見ると、読書を楽しんでいる子どもは多くありません。だからこそ、子どもたちの日常の選択肢に入るための導線づくりが重要です。現在、若者の情報収集は SNS が中心であり、そこから検索や行動につながる仕組みが求められます。図書館の公式 SNS から読みたい本をすぐ検索できる導線を整えることで、利用しやすくなる。二つ目は、長期的な視点として、家庭や地域の「余裕」を増やす取組です。保護者の多忙さや家庭環境による読書格差、地域ボランティアの減少などを考えると、読書の推進は福祉と切り離せません。今後は、福祉行政との連携を含め、地域全体の余力を高める視点が必要だと感じています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

SNSの活用と福祉の連携は、現代社会において非常に重要な課題だと思います。そのため、今後どのような形で活用していくか、担当部署で十分に検討いただきたい。そしてそれらの取組が、読書機会の提供につながると思いますので、改めて専門部会においても検討いただきたいと思います。

■ 報告－1 京（みやこ）まなびミーティングについて

令和7年11月5日、小林委員により、アスニー山科講演会として実施しました。

■ 報告－2 京（みやこ）まなびいニュースレターについて

今回、大規模な整備を終えた京都市役所を紹介しています。新京都戦略にも掲げられている「開かれた公共空間」として、市庁舎の休日開放や来庁記念スタンプの設置など、より親しまれる市庁舎となった様子を掲載しています。

■ 報告－3 令和7年度指定都市社会教育主管課長会議及び社会教育連絡協議会について

11月12日、20の政令指定都市が集い、オンラインで行われました。当番市である神戸市が提案した「コミュニティ・スクールの取組を通じた、学校と地域・企業・大学等との連携」について本市が回答し、協議を行いました。

■ 報告－4 京都市生涯学習市民フォーラム 令和7年度総会について

11月19日、京都市生涯学習市民フォーラム令和7年度総会を開催しました。総会では、フォーラム副会長の本郷議長と、同じく副会長の柁木副議長に御登壇いただき、京都市生涯学習推進者表彰や、新規加盟団体の紹介などを行いました。

（説明） こどもみらい館、子育て図書館について

■ 主催事業 及び 刊行物の案内

■ 生涯学習部長 挨拶

## ■ 閉会



この摘録の作成には補助的に生成 AI を利用しています。